
ネビルロングボトムは頑張ります！

しすてむだうん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネビルロングボトムは頑張ります！

【Nコード】

N2980BA

【作者名】

しすてむだうん

【あらすじ】

もしも、もしもネビルが少なくとも普通であったなら、どうなるのだろうか。

彼は一体何をして行くのだろうか？

これは、少し変わった物語である。

物語のハジマリ（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

どうも、しすてむだうんです。

ハリーポッターの二次ってあまり数がないですね。まあ原本が長いのもあるんでしょうが。

完結目指して頑張って行きますので応援お願いします。

ただ、作者は心が弱いので批判は嬉しくないです。

では、本文をどうぞ

物語のハジマリ

「――――これから―――それでも―――まっ――
――。」

カタコトと揺れる感覚がまどろみから僕を起こしてくれる。

まだ覚醒し切っていない視界の中で緑だけが鮮やかに印象に残り、どこかまだ夢の中にいるように思えてならない。

ぼーっとする頭が段々と冴えてきてようやく思考が始まる。

「とりあえずここは――どこだろう？」

視線を右に左に動かして見る。

右手には窓があり、何処までも続いて行きそうな緑丘が透き通った青空と美しいコントラストを成しており、写真家ならこのチャンスを逃さないだろうなあと思う。

反対に左手には、スライド式なのだろうか？ドアがあり時おり人が通るのがわかる。

どうもおかしい事に、皆浮ついた雰囲気醸し出しており、なかには黒い、ローブだろうか？、映画の中世のシーンに出てきそうな出で立ちであるのだが、今は気にしない事に出来ないだろうか。。。

「ふむ、とりあえずわかった事は、今僕は行き先のわからない列

車に乗っており、どうやら相席の人は今は席を外している、という事だけかな。」

彼の発した通り、正面の席には誰かしらの、見たところ女物の荷物が置かれて居るだけだった。

もう一度外を見る、相変わらず、いや少し憎いくらい天気は良い。

「イヤイヤ、落ち着いてる場合じゃないよ！何で知らない間に知らない列車に乗ってるのさ！！僕に何があったんだ！？」

目を瞑り額を軽く揉みながら記憶を辿って行く。。。

そう、たしかあれは昨日の事だった

「――、降りておいで、大事な話があるよ。」

「どうしたのお婆ちゃん？」

自分に関わる大事な話などあったであろうか、と問う様に頭を傾げながら――は部屋を降りて行く。

それが大きな人生の転機になる事を彼はまだ知らない。

「お前もようやく11歳になったねえ、早いもんだよまったく。しみじみという風に少年の前にいる老婆が話し出す。」

嬉しさと追憶の日々でも噛み締めているのだろうか、老婆の言葉は短いが無故か彼には重く聞こえた。

「ところで、お前さん今年から何処に通うって言ったっけ？」

「もう、急に何言ってんだよ、僕があんまりの学校に受かって行くって言った時に散々お婆ちゃん反対したじゃないか！隣の公立学校だよ。」

そう言うとなんか何故だろうか、急に老婆は視線をあらぬ所へ向け、罰が悪い様に「まるで近所の悪ガキが起こられてシュンとなっている様に」
しはじめて

「そう、その事なんだが、うーんと、その、だから、あの、」

余りに的を得ない口振りになにより不安な雰囲気を感じたが、話が進まないのだから切って彼は尋ねる。

「なんなのさ、大事な話なんですよ、言ってもらわないとわからないよ。」

老婆はしばらく視線を伏せて、なにも言わなかったがやがて意を決したのだろうか顔を上げた。

「実はな、あの学校の手続きなんじゃが、」

やってない。」

空気が、時間が止まった。

初めはぽかんとしていた少年だが、時間がたっても理解が出来なかった様だ、いやしたくなかったのだろう。

「は、、、？ いやどゆこと？ 手続きしてないって新学期明後日からじゃん、そもそもしてないって。あれ？」

頭を振る、悪夢を追い出す様に。

すぐる様に前を向く、何故だろうか視界がぼやける、祖母がなにやら木の棒を持っているー何時だか魔法の杖だと言い張っていた奴だー

「お前には悪いがーーーはホグワーーー、ダンブーーーとーー
ーーせかーーーー」

最後まで言葉を聞く事が出来ず世界が揺れ、闇に包まれた。

頭痛を感じる頭を抱えて呻くー怨みになるべく出る様にー

「あの、ババア、、、人を、いや人に、なにしてくれてんだ！！！

!!」

うがーと頭を掻き毟って居るとドアがいきなり開いた。

「あら、起きたの？すごくぐっすりと寝て居るから、魔法にでもかかったかと思っていたわ」（遠からず当たっているが）

にっこりと笑い女の子が入ってくる。小柄でふわふわした髪をしている。

自分の痴態を見られて顔が赤くなるのがわかる。

「あー、、君はその、部屋をチェックして、寝ている人を見かけるとコンパートメントにわざわざ入って見る人なのかな？」

その場を誤魔化せることを祈って言葉を返すが

「あら、ごめんなさい。向かいの席座らせてもらっているけれど、寝てる人から許可がいるとは思わなかったわ。」

と、あっさり返されてしまう。心なしか彼女の口の三日月がより深く描かれた様に見える。なんか悔しい。

しかし喋る相手が出来た事はいい事だと思う。自分の置かれている状況がわからない時は特に。

「えっと、君は、この列車が何時頃に着くかわかるかい？その、目的地に。」

「ええ、あと一時間と少しって車掌さんが言ってたわ。私喋る相手がなくて時間があつたから少し探検してたの。その時間いたわ。」
なぜか誇らしげに言われたがそこは無視しよう。

「あと、聞きにくいんだけど、なんで君服装が、その、斬新なの？そんな流行りってあつたっけ？」

オブラートに包んで先程からの不思議を聞いてみると、いきなり彼女が吹き出した。

失礼だと思う。。。。

お腹を抱えて笑っていた彼女は笑いの波が収まってきた様だ。
目尻の涙を指ですくって

「ふふっ、こんなに笑うこと久しぶりよ。このかつこそそんなに斬新じゃないわ、そうね寧ろ歴史的で趣のある物だと私は思うわ。」

「そうかな？少なくとも君にはそうだとしても僕は初めて見るよ。」

すると彼女は驚いた風に目を真ん丸にした。

情緒豊かな子だと思う。

「はじめて？本当に？？あと何時までも君って言わないで。
私の名前はハーマイオニー・グレンジャー、よろしくね。」

ハーマイオニーはそう言って向かいの子を改めてよく見る。

自分と同じくらいー男の子としては小さいのかしら？ーで普通の

体型、でも質問は面白い、魔法を知らないような発言ばかりしている。

「ああ、宜しくお願いするよ、ミスグレンジャー。」

そう言って彼は初めてニヒルに口に笑みを作りー何故がしっくりきているー

綺麗な澄んだ目で私を見て

「僕の」

後に彼は魔法界、ひょっとしたら世界に多大な貢献をするのだが

「名前は」

名前を言えないあの人に地味に嫌がらせをした男として名を馳せるのだが

「ネビル。ネビル・ロングボトムだ。」

彼はまだ、その事を知らないでいる。

石編(1) (前書き)

どうも今日は。

しすてむだうんです。

相変わらず計画性のない投稿していますが、できるうちに一つでも、投稿します。

では第二話どうぞ。

石編(1)

「あきれた、それじゃ貴方本当に何も知らないのね」

前に座っているハーマイオニーがやれやれとでも言いたげにしながら僕を見る。

あの後ーお互いの自己紹介が終わり、ようやく僕は自分の置かれている状況に付いて聞き出す事が出来た。

自分の持っている知識を少しへ・・・ばかり与える事の出来た目の前の少女は満足げにしているが、それによると

1、この列車はホングワーツ、え、ちがう？ えーとホグワーツだっけ

、に行くらしい

2、そこは魔法使いの学校らしく、前に僕が言った斬新な服装はがこの制服であるようだ

3、僕、制服も杖（魔法の行使に必要ならしい）も持っていないので帰ります。という作戦は、何故かそばにあった鞆に一式揃っていたので、すぐに失敗。

しかもお古っぽい、僕の家兄弟いないのに。。。

4、どうやら僕はお婆ちゃんに一杯食わされたらしい

それより魔法か、――僕はその存在の事については不思議に思わない。

よくよく考えてみると、確かに祖母はたまにあり得ない事をしだし、電話も使えなかったし。

それが全て魔法であると考えたと辻褄が合う事が多いのだから。最後のはともかく。

「しょうがないじゃないか、昨日まで魔法の事知らなかったし。お婆ちゃんの魔法使い宣言はあまり信用してなかったんだし。」
と頬を膨らましてハーマイオニーに答える。

「でも、何も知らないだけでこれからも過ごしてはいけないわよ。私はもう予習が進んでるから大丈夫だと思うけど。」

「えっ、教科書って向こうで配られないの!？」

話を聞くと不安が徐々に増してくる、だいたい学校の事を登校日に知るとかあり得ないと思う。

「そんな分けないじゃない! 皆ダイアゴン横丁で買ったりしてると思うわ。」

ハーマイオニーの所為ではないが、このようじゃお先は真っ暗だ。

多分皆気持ちはワクワクして、これからの事に想いを馳せてるんだ

ろうなあと想像しながら外を見る。
気分が爽快になりそうな景色だけど今の僕の気持ちじゃ楽しめる訳も無い。

そんな様子を見て彼女も僕の気持ちを察してくれたようだ。
労わるというか優しい眼差しで僕の事を見てる。

「でも、あんまり嘆き過ぎるのは良くないわ。少なくとも呪文は貴方も大丈夫だと思うし。」

やけに断言してる。気のせいかな誇らしげゲージ（僕命名）が25%増えてるし。

僕の訝しげな視線に気付いたのか少し焦りながら話し出す。

「べ、別に根拠がない訳じゃないわ。貴方が寝ていた時ね、私他のコンパートメントにいつてみたの。」

「その時ある子がネズミに呪文をかけようとしたんだけどね、その呪文、なんか独特な奴でね、失敗しちゃったのよ。」

何か思い出しているのだろうか、彼女の肩が揺れている。

ロン、お前。。。ってなんか変な電波が。

「そうだったんだ。じゃあ、すぐに成功できる物でもないんだね。」
嬉しそうに僕が言うところマイオニーも、あれは誰でも出来はしな

いつてニツコリしながら言った。
どういふことなんだろう？

その後話をするのもそこそこに風景を楽しんでいると、甲高い汽笛の音が聞こえた。

「ネビル！もうすぐホグワーツに着くわ。ローブに着替えた方がいいわよ。」

ハーマイオニーの助言と共に、列車の通路のあたりがバタバタと慌ただしくなってきた。
どうやら僕以外にも準備が必要な子は居るみたいだね。

ハーマイオニーにお礼を言って出て行ってもらい、初めて着るローブに四苦八苦しながら格闘すること少し。列車のスピードが徐々に落ちて来た。どうやら列車のお仕事は終わりみたいだ。

外に出るともうすでに辺りは暗く、夏の終わりなのに肌寒くぶるりと震えてしまった。

大きな針葉樹が周りを囲み、空気が澄んでいる。

「イッチ年生！イッチ年生はこっちだ！！！」

厳かな雰囲気の中を嫌にでかく、どこの訛りにも聞いたことがないような言葉が聞こえた。

声の方を向いてネビルは驚く。

デカイ。一言目はそれで十分だろう。

それは縦横どちらにも当てはまるが、物凄い大男が大声を張り上げながら歩いている。

彼が持っているランタンは普通の人であれば十分な明るさを得ることが出来るが、彼の身体の大きさとミスマッチでなんとなく頼りなく見える。

「イッチ年生は俺についてこい、こっちだ」

彼が歩きだすとそれまで呆然としていた子達は慌てて後を追った

「4人ずつになって船に乗れ。そうだ、、おいっ！あまり時間は

ないぞ。ダンブルドア先生をまたしちやならねえ。」

「よし全員乗ったな？座ってしっかり船を掴んでおけよ。落ちたりしねえようにな。」

大男が皆座ったのを確認すると船が独りでに走りはじめた。これも魔法の一端なのかとざわめきが広がる。

「驚いてるってことは、やっぱり皆魔法に精通してはいないみたいだな。」

と僕は胸を撫で下ろした。流石に自分だけ驚いていたら困った事になるがそうではないらしい。

「まあ、今はこれからの心配よりこの一瞬を楽しめますかね。」

それ美しかった。

波の立たない船がガラスのように澄んだ湖の上を滑って行く。

少しづつ見え始める星空と船の上に備え付けられている燭台のキャンドルが合わさり、湖のうえに満天の星空を描き出す。

長い針葉樹の影と沈み切る前の太陽の紫がかった明かりが見事なコントラストを見せる。

大きな自然はそれだけで人に畏怖を植え付ける。

高い建物などなく、只々広い自然が眼前に広がる。

まさに魔法みたいだな。ぽつりと誰かが零す。

それはまさに、魔法。ただそれだけであつたのだろう。

「ハグリット。引率ご苦労様でした。

ここからは私が引き継ぎます、貴方は先に行きなさい。」

さっきの夢見心地な風景の感動に包まれていた新入生たちは、いきなり聞こえたパリッとした声にハッとさせられた。

強制的に背筋を伸ばす声ってあるんだなあ、と呑気に心の中で思いながらもネビルも声の方を向く。

「マクゴナガル先生、ありがてえ。後はよろしくお願いしますだ。」

今度の先生は妙齡の女性であった。背中に針金でも入っているんじゃないかというぐらいに一直線の背筋。

眼光鋭く、一目違えば恐ろしいと思わせる目つき。

なんというか、ザ・委員長だった。それもレベル100の。

「一年生の皆さん、次は私について来てください。」
と言ったら直ぐに歩き始めてしまった。

歩いていると何処からか「このホグワーツの歴史はーーーー上の
ーーーー魔術でーーーー」とハーマイオニーの声が聞こえる。

あの子すごいなあ、なんて思うネビルであったが、どうしてか首の後ろが冷たく感じる。

（列車でも思ったけど、あの子いい子なんだけど、ネビルレーダーが危険信号だしてるんだよね。なんかこう、厄介事的な意味で。）

後に彼はそれが正解である事に気付くのだが、それはまた別の話。

そうこう考えているうちに、大きなドア寧ろ門と言うべきであろうかーの前に着いた。

途中なんか幽霊みたいのがいた様な気がするが皆何も言っていなかったし、多分見間違えだな、と見当違いな事をネビルは考えながら先生の動きを待つ。

「では、一年生の皆さん、これから組み分けの儀式が始まりますので部屋に入ったら、静かに、音を立てないで待っている様に。」

え？儀式？？？

組み分けて紙に張り出すんじゃないの？？？と考える少年いた。

石編(1) (後書き)

つ、疲れた。

ネビル君、これからどうなるんでしょうかね(笑)

皆さんの感想ありましたら、よろしくお願いします。

石編(2) (前書き)

どうも、しすてむだうんです。

今回はようやくいろんなキャラが出始めます。

文章を書いていると本当にその難しさが感じられます。

もっとうまく書きたいなあ。。。

石編(2)

魔法の儀式、と聞いて一体何を思い浮かべるであろうか

陣の周りを人が囲み、ブツブツと怪しげな呪文を唱える？

それとも杖を使って魔法を実践してみるのだろうか？

しずしずと周りを伺う様にしてドアをくぐっていく。

部屋の中には既に上級生と思われる人達が左右に二つずつ、合計4つのテーブルに座っており新入生達を観察している。なんか目がギラついてないか？

まるで名前だけ知っている有名人を探す様な視線を感じながらも、その辺な視線が余り気にならないネビルであった。

「お、落ち着け俺！」

まあ、それを気にする余裕が無かっただけであるが。
口調も変わってるぞ。

落ち着け！冷静になってよく考えてみよう、と彼は思った。

組み分けの儀式があるという事は、何らかの方法で僕たち新入生達を分けるという事だ。

その方法がわからないのは非常に怖いが、周りの子の表情からして皆方法を知らない様だし、先刻の船で分かった様に魔法をみるのが初めての子もいる。

この事から推測すると、あまり難易度の高い様な事はしない、いや出来ないはずだ。

なんだか前の方がざわざわしているが背が低いから見えない。
目の前の二人がデカイせいだ。
ちくしょう。。。。

「お静かに。」

短いが、鋭く、ぴしゃっとマクゴナガル先生が言う。
それだけで新入生はともかく、上の学年まで姿勢を正すから驚きである。

「これから組み分けの儀式を始めます。名前を呼ばれたら前に出て、

組分け帽子をかぶりなさい。」

そう言うが直ぐに声が辺りに聞こえだす。くぐもっているが、部屋全体に響き渡る。

帽子は歌う高らかに

誇り高く、歴史をもって

暖かく、僕らを迎える様に。

歌が終わる。余韻は残るがネビルはホッとした。

組み分けは試験でもなんでもなく、個人の資質を帽子が判断するということがある。歌から推測出来たからである。

ネビルは茨に締め付けられていた自分の心が痛みから開放されるのを感じ、思っていた以上に不安を感じていた自分に気づき、苦笑を漏らした。

「アボット・ハンナ!!」

組み分けがとうとう始まる。名前を呼ばれた女の子が弾ける様に顔をあげ、不安そうな表情を貼り付けて前に出る。

無理もない、とネビルは思う。此処にいる全ての人に注目されるのが分かって出て行くのだ。しかも、あの胡散臭い帽子のところに。

きつと心臓がバクバクいってるんだろなとさっきまでの自分の事を棚にあげて思考に没入していると、いきなりワツと歓声があがった。

どうやら彼女の組み分けの瞬間をを見逃してしまった様だ。

儀式はア行から始まって、帽子は一人づつー時間には差こそあれー「ハツフルパフ!!」やら「スリザリーン」とか叫び、順調に進んでゆく。

果たして自分は何処の寮になるんだろう、と考えていると

「ハーマイオニー・グレンジャー！！」と聞こえたので、前の二人は相変わず邪魔なので、身体を横に伸ばし隙間から見てみる。

ハーマイオニーは自信満々かと思っていたが、他の子と同じ様に緊張の色が見えた。

彼女はふわふわの髪が隠れてしまいそうなくらい深く帽子をかぶっていたが、暫くすると

「グリフィンドール！！！」と高らかに帽子が叫んだ。

ハーマイオニーは頬をリンゴ色に色付けながら嬉しそうな顔をして、小走りでグリフィンドールの人達の座る席へ行った。

彼女はおそらくレイブンクローに行くと思っていたネビルは驚いたが、彼女の嬉しそうな顔を見て心の中でおめでとうと一言言った。

「まったく、本当にグリフィンドールは汚れた人達がよく集まるよ。信じられないな。な、君もそう思わないかい？」

といきなり横の子から話し掛けられたネビルは、自分が祝った瞬間に、言っている意味はわからないが恐らく悪口であろう事を言われ、

水を差された気分になったが、返事はしなければと話し手の方を見た。

「そう？僕はべつに集まりやすいとかはわかんないよ、それに僕らを分けるのは帽子だしね。」

と差し当たりの無い様に横の少年に返した。

「ふーん。まああの帽子は確かにボロいし、とても僕にはふさわしくないと思うね。」

よくわからない理論を振りかざしている金髪の少年――造形は整っており、ただ惜しくらむはデコが、眩しい――は自身たっぷりな様子でいる。

「僕は絶対にスリザリンになるね、マルフォイ家の人間がグリフィンドールなんかに入ったら、僕死んじゃうと思うよ。」

じゃあ思いつき死んでくれと思った僕を誰も責めは出来ないだろうし、うっかり口に出しそうになってしまったのを止める事が出来た僕を褒めて欲しい。

とりあえず、僕の父様は―――それで―――マルフォイ家の―――とか言ってるデコは適当に相槌を打ってほうっておいて周りを見るともうかなりの数が終わっていた。

「ドラコ・マルフォイ!!」
と名が読み上げられると、横にいた金髪オールバック君が前に歩いて行った。

彼は他の子と違って自信満々にしていて、帽子のところに近づいていく。

「ドラコ、退場!!」なんて言ってくれないかなあ。そしたらかなり笑えるんだけどと不謹慎にも考えながら帽子を見てみると、彼が触れるか触れないかのところで帽子は「スリザリン!!!!」と叫んだ。

鼻高々にミスターマルフォイはスリザリンのテーブルに向かっていく。スリザリンの先輩方も何だか他の子達の時より嬉しそうだ。なんだでろ?

「ネビル・ロングボトム」

とうとう名前が呼ばれた。
消えていたはずの不安が真夏の入道雲のようにむくむくと生じてくる。

ネビルはなるべく下を向いて歩いてゆき、用意された椅子に座ると帽子を一気にかぶった。

「ふーーーーむ、ロングボトムのこ倅か、ゝゝ」

いきなり話しかけられてビックつとしてしまったが、気になるワードがあった。

「こ倅って、僕の家族の事を知っているの!？」

「ああ、知っているとも。今まで誰がホグワーツの組み分けをして来たと思っているのかね。」

「・・・いや、僕の親がホグワーツに来ていた事を知らなかったから驚いていたんだけど・・・。」

「・・・・・・・・そうか。つとあまり長くはしゃべっていらんな。ロングボトムの子と言われれば決まっておる。」

そういつて息を大きく吸い込み

「グリフィンドール!!!!!!」

その瞬間、ネビルは過去一度たりとも感じた事の無い警報がネビルセンサーから発せられたのを感じた。

身体が反応するままに、頭の上の帽子を掴み上げ

――それは一見歓喜の姿で腕を振り上げたように見え――

腕を名一杯のところまで上げ、それを

――喜びが爆発したんだなと周りに思わせ――

スパーンといい音になるくらいまで、渾身の力を込めて地面に投げ付けた。

歓声をあげていた姿のままで止まってしまったグリフィンドール生を尻目に帽子を拾い上げ、もう一度かぶり直す。

「・・・ハップルパフかレイブンクロー希望。」

端的に用件だけ伝えて帽子の反応を待っていると、いきなり帽子が取り上げられてしまった。

見るとマクゴナガル先生が素敵な笑顔で――青筋が一緒だが――僕の事を見ていて

「いいですか、ロングボトム。私が指差す方向に、今すぐ、性急に
行きなさい。」

と言われてしまった。

反対する事はできなかったの（ぼくの意気地なしっ）仕方なく
先生の指の方向、すなわちグリフィンドール生の座るテーブルに
いく。

どんよりとした僕のオーラを感じたのか、誰も話しかけてこなかった。

なんともいえない空気が広がっていたがそれは

「ポッター・ハリー！！」

と先生がいった瞬間に遙か彼方に飛んでいってしまった。

急にざわざわし始める人々

「あれが？」 「そうだよ彼だ」

「ハリー・ポッター」「生き残った男の子」

「名前を言っではいけないあの人を倒した。」

自信なさげで周りをキョロキョロと見ながら、黒髪でくしゃっと癖っ毛の男の子が出てきた。
そして帽子をかぶる。

彼が椅子に座ってから何分がたったのだろうか？
5分、いや10分とも思えるなか、シーンと物音一つ響かない空間で。皆が固唾を飲んで帽子の言葉を待つ。

帽子は悩みに悩んだ様子であったが、やがて意を決したようで

「グリフィンボール！！！」と今までより一際大きな声で叫んだ。
その瞬間！

ウオオオオオやらキャーキャーキャーッやら物凄い歓声が響き渡った。

何処かで「ポッターを取った!!ポッターを取った!!」という絶叫を聴きながら

さようなら僕の平和の日々、と悟りを開いて天井を見上げる少年がいた。

天井にはただ満天の星空が魔法で映されているだけであつた。

ちくしょう。。。。

石編(2) (後書き)

どうでしたか？楽しんで頂けたでしょうか？

作者の家には賢者の石とか秘密の部屋がないので、中学の頃に読んだ記憶を元に行っているの、名前が違っていたりするかもしれませんが。

もしそんな事があれば、こっそりと教えて頂けたらと思っております。

今回では、まだ本格的な他のキャラとの絡みはありませんでしたが、早くいろんな子と関わらせたいですね。

それでは皆さん次のお話でお会いしましょう。

石編(3) 〱初授業〱 (前書き)

どうも、しすてむだうんです。

少しずつですが皆さんに読んでもらえている様で嬉しいです。

ただストーリーの進み具合こんなんでいいのかな？

石編(3) 初授業

魔法使いの修得すべき事は思っているよりも多い。

それは魔法は魔法界外では秘匿するものであり、むやみやたらに使う事は出来ないからである。

なのでホグワーツでやるべきことも勿論多い。

呪文や薬草学だけでなく、魔法行使における法律や魔法生物の生態やその撃退法などとも学んでいかなければならないのだ。

入ったばかりの新入生達もその例に漏れず、カルキュラムはしっかりと組まれている。

何事も基礎が大事なのだ。その積み重ねがあって、より専門的な方向に進む事ができる。

「ふーん・・・以外とぎっしりだ。予習と復習の時間の配分をどうやって行こうかな？」

昨日の組み分けの後、グリフィンドール寮に案内された僕らは監督生から一年生用の時間割を貰った。

すぐに確認しようとしたけど、自分達の部屋に入って用意をしてベットのの上に横になったら、何時の間にか寝ちゃったんだよね。

「薬草学に飛行学、それに変身学。やっぱ見慣れないものばかりだよ。」

「今日から授業なのにもう溜息ついてどうするのよ。」

「うわっ!？ってハーマイオニー。いきなり話しかけないでよ、びっくりしたじゃないか。」

「ごめんなさい。なんか歩きながらブツブツ言っていたから話し相手が必要かと思って。」

笑いながら又いつもの様に口に三日月を作ってハーマイオニーは僕の横を歩き出す。

「それ、時間割？」

「うん。君はもう確認したの？結構科目が多くてびっくりしたよ。」

「ええ、昨日寝る前にね。少し時間があつたから予習もバッチリよ。」

「予習まで!？君、本当に凄いな。」

本当に彼女凄いな、僕ら一年生の中で一体どれ程の人が予習出来るんだろう。

「ねえネビル、もしよかったら朝食一緒にしない？まだ食べてないんでしょ？」

一瞬悩んだが、昨日の組み分けの出来事もあり、知り合いを作れなかった僕にとっては願ってもないお誘いだった。

「うん、いいよ。今ならまだ朝早いしゆっくり朝食取れるだろうね。」

~~~~~

ハーマイオニーとの朝食が終わってネビルは寮の自分の部屋に戻る。今日の分の教科書を準備し時間を確認すると、まだ授業まで時間は幾分がある。

「ふむ・・・時間潰さないとな。予習は・・・まだ最初の授業日だからいいとして、そうだなあ、散歩でもしようかな。」

思いついたら即行動。っとその前にまだ寝てる子は起こした方がいいな。流石に朝食食べて行くなら時間ギリギリになっちゃうだろう

し。

寝ている子を見る。赤毛のショートヘアでそばかすが印象に残っていた子だ。確か名前は

「ドナルド・ウィーズリー？いや、なんか違う。

えっと・・・そうだ！ロナウド・ウィーズリー！  
ウィーズリー君起きてー。もう朝だよ！」

目をこすりながらロンが起き出す。かなり眠そうだ。

「ふああああ。あれ、君は？」

「えーと、ネビル。ネビル・ロングボトム。同室の一人さ、よろしくウィーズリー君。」

「ロンでいいよ。ウィーズリーだと沢山当てはまっちゃうから。兄さん達がね、グリフィンドールにいるんだ。」

「そう？じゃあ僕の事もネビルって呼んでね。

そうそう、時間大丈夫？僕は用意出来たからもう行くけど、早くしないと授業に遅刻しちゃうよ。」

後ろの方からドタバタ。ハリー！早く起きて！！というロンの声をBGMにして部屋から出て散歩に行く。

~~~~~

ふう、と思わず漏れた溜息とともにポスッとベットに飛び込む。夕食は満足いくものであったが自分の疲れを癒し切ってはくれない様だ。

「うう、やっと一日が終わった。しばらくは予習より復習中心にしていこう。」

と頭を悩ませながら今日やったところのページを開き、記憶の糸を辿っていく。

~~~~~

授業一日目、グリフィンドル生はなかなか良くやっていた。本格的に魔法を習うという事で真面目に先生方ニーやはりとてつもなく個性的なニーの話聞いていた。

僕？そりゃあ勿論聞いていたよ。ただ魔法史の時、出て来た先生を見て絶叫しちゃったのは、物凄く恥ずかしかったけれど・・・だいたいゴースト（後でハーマイオニーに教えてもらった）が先生ってどういう事よ？

コホン。まあその事は置いといて、僕らはしっかりとやっていた。

ハーマイオニーは宣言通りどの授業でも先生の質問に答え早くもグリフィンドール寮に点数をいれていたし。ロンは以外と先生方に詳しくて、兄弟からの情報らしい、授業の進度とかどんな先生かを冗談交じりで教えてくれたし。

ただ、もちろん上手くいくばかりでは無かった。

「皆さん、このクラスでは変身学を学びます。この学問では、物質を他の物に変えたり、高度になれば姿を変えたりすることを学びますが、暫くは前者を中心にやっていきます。高度ではないと言っても舐めてかからない様に。」

マクゴナガル先生は相変わらずピシッとした姿勢でグリフィンドール生の前に立つ。

「今日はさわりですが、皆さんの前にあるマッチを針に変えてもらいます。では2人組になって始めてください。」

僕も頑張った、ああ頑張ったさ!! でも・・・

「ミスターネビル。これがあなたの?」

今マクゴナガル先生が見ているのが僕の完成品。

艶、硬さ、しなり、先っぽの尖りまでパーフェクトと言えそうなそ

れは

「確かに針といえば針と言えそうですが、材質が木のままといいはいただけませんね。」

完全に爪○枝だった。

どうしてこうなった。orz

頭の奥で「ネビル仕様ですからwww」と声がした。  
ちくしょう。。。

僕にとっての最悪はそれであつたが、グリフィンドール生にとっての最悪はたぶん魔法薬学だろうな。

授業の鐘がなるとクラスにひよろつと縦長の先生が入って来た。長い黒髪に、病人にも見える程の顔の白さ、なのにギラッとした眼が座っている僕らを睨め回す。

「このクラスでは、魔法調剤の繊細な化学と、細密な芸術を学ぶ。それで、これでも魔法かと思う諸君が多いかもしれないが、夢夢忘れないように。この学問は魔法界を形作った一端を担っている、ということを。」

「フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち昇る湯気、人の血管の中をはい巡る液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力・・・

諸君がこの見事さを芯に理解することを我輩は期待していない。  
我輩が教えるのは、名声を詰めにし、栄光を醸造し、死にさえふた  
をする方法である。」

そこでまたスネイプ先生は僕らをジッと見て

「我輩が期待するのは、吾輩がこれまでに教えてきたウスノロより  
諸君がましであれば良いのが・・・ということだけだ」  
と親の仇でも見るように言った。

このまま何事もなく授業がすすめば良かったんだけど・・・

「ハリー・ポッター。ああ、さよう、我等が新しいヒーローだ。」

ハリーの所でいきなり猫撫で声で先生は話し始めた、一緒に授業に  
参加しているスリザリンの生徒から笑いが起こる。すると、

「ポッター！！！！！！！！」

と突然先生が叫んだ。

「アスフォデルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると  
何になるかね？」

ハーマイオニーが手を挙げたが、無視されてしまっている。

「わかりません。」とハリーが答えると、ニンマリと嫌な笑みを浮  
かべた。

「なるほど、なるほど・・・我らがポッターは我輩のする矮小な授業には予習が必要ないと・・・では続けて聞こう、ベゾール石を見つけてこいと言われたら何処を探すかね？」

またもハーマイオニーが天高く手を挙げるが全く相手にされない。

「わかりません。」と苦虫を噛み潰したようにハリーが答えると、我が意を得たりと言った風に益々笑みを深める。

「ほう、ほう。余りに簡単すぎて答えられないと、ではモンクスフードとウルフスベーンの違いならどうかね？」

ハーマイオニーがもう身を乗り出す様に手を挙げる。

「・・・わかりません。でもハーマイオニーがわかる様なので彼女に聞いたらどうでしょう？」

ハリーの返しにグリフィンドル生から笑いが起こる。

「自分の出来なさを反省している様子がない、グリフィンドル5点減点。」

とまあこんな感じが始まり、ハリーは終始先生のネチネチ攻撃の的になり、その度にスリザリンの生徒から笑いが起こるのでグリフィンドル生は非常に嫌な時間を過ごしたのであった。

~~~~~

復習が終わった教科書を片付け、ベツトにゴロンと横になる。

思った以上に簡単にはいかないんだなあと思い、変身学でくすねて来たマツチをベツトの上に置く、杖を構えて周りを見回し、誰もいないのを確認してサッと杖を振るとマツチは少しの間プルプルと震えて

やっぱり○楊枝になった。

ちくしょう。。。。

石編(3) 〱初授業〱 (後書き)

とうとう授業が始まりました。が、うちのネビル君はまだまだひよっ子です(笑) 性格が変わっても資質は変えられませんからね。

次は飛行かぁ・・・どうしようかなぁ。

面白く書けたらいいんですがね(苦笑)
それでは皆さんまた次のお話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2980ba/>

ネビルロングボトムは頑張ります！

2012年1月9日11時46分発行